

「男気」と「誰も一人にしない」

浅野慎一(神戸大学)

第28分科会の第1報告は、鹿児島市で清掃・守衛受付等の事業を行う「鹿児島谷山事業所」だ。この事業所は高齢化に悩み、若返りを目的として、ひきこもりや自信喪失で就労困難に陥っている若者を受け入れた。当然、契約先や事業所内部から「そんな人を受け入れて、何かトラブルが起きたらどうする？」と不安が噴出した。報告者の榎木賢二所長もあれこれ迷ったが、最後は「俺が責任を取る」と男気を見せて受け入れを決めたそうだ。分科会参加者から、「やっぱり男気は(男女を問わず)大事だ」との感想が相次いだ。

では、榎木所長はなぜ男気を発揮できたのか。私が思うに、3つの条件がある。

第1は、若者の就労困難を、個人の問題・自己責任ではなく、社会的背景にまで溯って捉える社会的視野をもっていったことだ。競争主義・能力主義・管理主義・経済効率優先の社会の生きづらさは、決して就労困難に陥った若者だけの問題ではない。我々みんなが苦しめられている、つまり我々が解決すべき社会問題だ。

第2は、「対立こそ成長の必要条件」という確信だ。実際に就労困難の若者と一緒に働くと、「効率が悪い」「ふまじめ」「自分は頑張っているのに」など不満が出て、対立が起きる。でも所長はおそらく、たとえどんなに対立しても、「効率至上主義・自己責任が当然だ」という結論にも、逆にまた「できなくて当然、現状維持でいいのだ」という結論にも落ち着かず、みんなが行きつ戻りつして共通の合意に至るだろうという仲間への期待・信頼をもっていったと思われる。

そして第3は、人の「隠れた可能性(潜在能力)」への洞察だ。その人が今、何ができるかだけでなく、「こういう環境さえ整えれば、こんな仕事ができるようになるはず」という見方だ。そんな見方ができるようになるには、仕事と無関係な部分も含め、相手を人としてトータルに知る必要がある。また社会という環境は与えられた宿命ではなく、主体的に変革できるものだという確信が根っこにある。

こうした豊かな人間観・社会観が、男気を生んだに違いない。だからこそ女性にも、そうした意味での男気は大切なのだ。

さて、第2報告は日本のビジネス中心地・東京都港区で、多様な子育て支援に取り組む「みなと子育て応援プラザPokke」である。コロナ禍で事業継続・団会議の開催すら困難になる中、様々な工夫をこらしてスタッフの生活の悩みを共有し、不安を緩和するだけでなく、在宅勤務を通じて新たな個性的な仕事を創出していった。

なぜ、そんなことができたのか。

報告者の上田洋子施設長は、その秘密を「事業の価値より、人の価値」、「誰も一人にしない」ことだと語った。コロナ禍の下、単に「事業の休止か、継続か」ではなく、スタッフとその「生命－生活（life）」を何より重視した。もちろん実際にスタッフが抱える問題・不安を完全に解消することはできない。でも人間は孤立すると、困難を自分だけで抱え込み、精神的にも追い詰められてしまう。「我慢強いのは良いこと」、「人に迷惑・心配をかけてはいけない」といったモラルが、孤立をますます助長する。

でもコロナ禍も、生活苦や子育ての悩みも、実際は個人の問題ではなく、社会の問題だ。それらに苦しんでいるのは、決して自分だけではない。だから自分だけが我慢すれば済む問題でもない。「人に迷惑をかけたくない」というのは立派だが、それは「人に迷惑をかけられたくない」という利己主義の裏返しでもある。社会問題は、一人の我慢や努力では解決しない。「誰も一人にしない」という仲間への関心と尊重、そして連帯が不可欠だ。

こうした連帯の能力を一番失ってしまいがちなのが、高学歴の専門職の人々である。競争主義・能力主義の社会で勝ち上がり、生き残るには、他者に弱みは見せられない。それだけにストレスは身近な弱者にぶつけられる。Pokkeにも、医師・弁護士・大学教員やその家族から児童虐待やネグレクト、DVの相談に来ている実態が報告された。「港区」ブランドに憧れて高級マンションに住む専門職も、高家賃で極めて狭隘な部屋にしか住めず、コロナ禍によるテレワークでますますストレスが激化しているとのことである。

谷山事業所の就労困難の若者も、Pokkeに駆け込む専門職の人々も、同じ一つの社会の被害者だ。そして被害者は単なる救済の対象ではなく、連帯して社会を変える主体である。